

西行の木像と江戸町人大井定恒のこと

桑原博史

一、西行の木像

大阪史談会編『西行法師文獻目録』（昭和一五年刊）という本がある。その時点までの西行に関する研究文獻を網羅して、大変に便利な本である。その五七頁から五八頁にかけて、西行の木像が一六体あげられている。画像も多いが、それは今のぞく。石像はわずか一体なので、木像の中に入れて紹介する。その一六体の中には、目録編纂時にすでに失なわれていたものもあるが、それから四〇年以上へた現在、どうなっているか、現況を確かめたい。取りあげる順序は、目録の順で、終りに新たにその存在を知ったものを加える。

1、西行木像

目録では「集古十種所載、河内金剛輪寺釈迦堂安置（駒ヶ谷）、今亡」とある。

「金剛輪寺」は、現在、大阪府羽曳野市駒ヶ谷にある。いにしえの竹内街道に面し、竹内越えの大阪側の入り口になっている。ここに蔵されていた西行像は、昭和一〇年代にすでになくなってしまったのである。『集古十種』を見ると、それは胡座を組んで手を重ねた座禅の姿の像である。首を、向かって左にやや傾け、目は半眼に閉じたおだやかな表情である。田口卯吉氏「王朝の末」上（雑誌史海明治二八年九月号）に挿絵にも使われているが、それも『集古十種』に拠ったのであろう。

2、西行木像

目録に「伝頼阿刻、京都帝室博物館」とある。これは現在も、京都国立博物館に蔵されているが、未見。
尾山篤二郎氏『校註西行法師全歌集』（創元文庫昭和二十七年刊）の口絵に、写真が掲載されている。それによれば、右脚を胡座風に横にし、左脚を立てて、その上に左手を置く、めずらしいポーズの座像である。右手は床につけ、体に斜めに風呂敷包みらしきものを背負っている。頭はやや上方に向け、物を見上げている風情である。大きさはわからない。

3、西行木像

「伝文覚刻、河内弘川寺蔵」とある。現在も、大阪府南河内郡河南町の弘川寺西行堂に安置されている。

梅沢和軒『山家集詳解』（武蔵屋書店明治四四年刊）の口絵に、「木像は風手超凡、彼の荒行者文覚をして、文覚をこそ打めと畏敬三嘆せしめたる北面の武士藤原義清、其人を想見せしむ豪傑的作品と云ふべし」云々という文章とともに収められている。他に安田章生氏『西行』（彌生選書昭和四八年刊）加藤政吉氏『西行管見』（短歌新聞社昭和五〇年刊）にも、口絵に用いられている。

台座が写真によって異なるのは、撮影のために場所を動かしたためであろう。西行堂においては、木の台座の上にある。約七〇厘の丈である。座禅の状態で、両手を胡座の上に組み、顔は正面を向き、眼をつむり、口もとに笑みを浮かべる。『さきの金剛輪寺蔵のものとともに、『集古十種』に収められて、古くからその存在を知られていたものの一つである。

4、西行法師坐像

「伝西行作、東成郡天王寺村字中寺町三五、持明院蔵」とある。未見。

「持明院」の所在がはっきりしない。「東成郡」や「天王寺村」から連想される現在の大阪市東成区や天王寺区には「中寺町」の字がなく、南区に中寺町なかつらまちの字が残っている。ここは天王寺区下寺町、生玉町、上本町から引きつづいて带状に大寺院のあった所である。江戸時代、大阪の市街地を整備するために、市中の寺をここに集めたためで、かつては二百の寺があったという。「持明院」はその中の一つか。

5、西行法師像

「伝西行作、大阪江口寂光寺藏」とある。未見。

寺は、現在、大阪市東淀川区南江口町二丁目。西行と江口の遊女との応酬にちなみ、元久二年（一二〇五）遊女たな妙が出家して開いたのが、寂光寺であるという。境内に西行塚と江口の君塚とが並び、本堂に兩人の木像があるという。

6、西行法師木像

「東京、竹柏園藏」とある。所在不明。

7、西行法師木像

「小野庄兵衛作、砲兵工廠内、後樂園旧藏」とある。これは、この直前に掲げている「光茂筆西行物語絵巻」とともに、関東大震災で焼失したものとされている。

8、西行木像

「伝文覚作、大磯鳴立庵藏」とある。

これは現在も、神奈川県大磯町の鳴立庵西行堂に安置されている。約一米の高さのもので、右脚を横に胡座に

し、左脚を立てて右手でその膝のあたりを抱き、左手でその右手の手首をつかんでいる。顔は前方を向き、はげしい表情をしている。うるし塗りであったものが、頭上や胸のあたり一帯がはげてしまったので、いっそう異様にはげしく見える。

鴨立庵は、荻原井泉水氏『古人を尋ねて』（偕成社昭和一八年刊）中の「大磯の春」という文章で詳細に述べられているほか、触れている文章が多い。木像は、加藤政吉氏『西行管見』（前引）の口絵に収められている。

9、西行木像

「東京千住幸手、東大寺蔵」とある。

これは、西行が奥州行脚の途次、一時足をとめたという伝承（『新編武蔵国風土記稿』）を持つ、埼玉県北葛飾郡杉戸町下高野の東大寺に伝来したもの。東大寺が廃寺となって以後、現在は隣の幸手町幸宮神社さちみやに保管されている。

七〇糎ほどの高さの像。右膝を立て左足を前にくずしたくつろいだ姿である。顔は正面を向き、ほほえみを浮かべている。立てた膝や左手のあたりが破損している。埼玉県立博物館が昭和五一年開催した「さいたまの肖像展」に出品され、図録に収められている。

10、西行木像

「京都東山双林寺蔵」とある。

これは、京都市東山区円山公園裏の西行庵に安置されている。七〇糎ほどの高さで、正座して両手を膝の上に置き、茶人風である。顔は正面をむき、ほほえみを浮かべた温顔である。西行庵発行の絵はがきの一枚となっている。

11、西行木像

「京都西山花の寺勝持寺蔵」とある。

京都市右京区にあるこの寺には、かつて西行庵があり、そこに安置されていたという。現在は、改築された資料館の中に安置してある。八〇糎ほどの高さのもので、正座して左手を膝に、右手は数珠を持って胸のあたりにあげている。顔は正面を見て、ほほえみを浮かべている。窪田章一郎氏『西行の研究』（東京堂昭和三六年刊）の口絵に収められている。

12、僧西行立像

「清水立慶作木造一軀、久保田庄左衛門氏蔵」とある。未見。

13、西行木像

「吉野水分神社蔵」とある。

これは現在、奈良県吉野町の吉野水分神社の回廊に安置されている。高さ六二糎くらいの座像。正座して左手を膝に、右手に数珠を持って胸のあたりにあげている。背に銘があつて、「奉納天明五乙巳春願主／江戸南鍛冶町大井八右エ門定恒／細工人同中橋益田慶運」と三行に刻されている。

宮司山本康男氏の御教示によれば、像は古くは奥千本西行庵に安置されていたが、明治の末、庵は無住となつたため当社に移されたとのこと。昭和五六年二月東京大丸展で開かれた「大和の国吉野展」に出品された由である。

14、西行木像

「讃岐仲多度郡吉原村、山里庵蔵」とある。

これは、少し疑問がある。「山里庵」というのは、香川県善通寺市の水基の岡と呼ばれる岡の中腹にある西行庵をさすものであろう。その一間四方の堂の中には、無名の木像がある。民間信仰の対象となっていて、帽子や衣服をまとうていて、形状もさだかでない。これが西行像とは、断言しがたい。

佐藤恒雄氏の調査によれば、善通寺市には、次のような西行像が現存している。

イ、善通寺蔵西行木像

伝頼阿作。六〇糎あまりの小さなもの。台座の上に、やや腰をかがめつつ立っている。包みを背負って胸の前で結んでいる。前方を見上げている風情である。

ロ、玉泉院蔵西行石像

六〇糎ほどの高さの立像、布地の衣服を着せられているので、手足は見えない。顔は摩滅して目鼻がはっきりしない。

ハ、曼荼羅寺蔵西行木像

高さ七〇糎あまりの座像。右足を胡座にし、その上に右手、左足を立ててその膝に左手を置いて、正面を見る。

「山里庵蔵」というのは、あるいはイカハをさすものであったかもしれない。

15、西行石像

「高一尺五寸余坐像、讃岐白峰神社蔵」とある。未見。14のところであげた口の石像は、これと関係があるかもしれない。「白峰神社」は「白峰寺」のあやまりであらう。

16、西行木像

「立像、伝自作、名古屋郊外小牧山下玉林禪寺」とある。

これは、「玉林禪寺」がわからない。しかし小牧山下にあるというところ、愛知県小牧市市之久田にある本光寺にある木像をさすのであろう。これは五六種あまりの立像で、杖を双手につき、やや上向きに顔をあげて、休んでいる風情である。

伝承では西行は、同じ小牧市東原町の春日寺に一時身を寄せていたが、その間木像を刻んで残して立ち去った。村人は西行堂を建てて木像を安置したが、春日寺が廃寺となるに及んで堂もこわれ、木像も転々とした。最終的に文化年間（一八〇四—一八一八）に至って、本光寺に落ち着いたという（『愛知の伝説』日本の伝説7・角川書店昭和五十一年刊）。

17、西行木像写真

宮内庁書陵部蔵。明治期の写真。岩をかたどった木の株の上に、腰をおろしている西行。わらじ、僧衣を身につけ、旅の風情である。包みを背負い、胸の所で結んでいる。右膝の上に右手をおき、左手で右手首をつかむ。右足を左膝の上に載せる。

寄せ木造りらしく、腰の部分に横に割れ目、首から胸の部分に縦の割れ目がある。顔は正面をむき、目を見ひらく。原物の所在、大きさは不明。

以上から、西行木像の風姿を類別すると、第一に、弘川寺、勝持寺、吉野水分神社などに蔵せられる座禪姿のものがある。この変型として、東山西行庵蔵の茶人風の正座姿がある。第二に、京都国立博物館、鴨立庵、幸宮神社などに蔵せられる、旅の途中で休んでいる体の、右脚を横に左脚を立てた姿のものがある。本光寺蔵の立

像、書陵部蔵（写真）の腰掛け姿も、旅に行く西行のイメージを具体化したものである。

二、大井定恒のこと——その一

これらの西行の木像が、伝承はともあれ実際に、どういう事情で製作されたかを知る手がかりになるのが、13の吉野水分神社蔵の木像の銘である。

その銘によってこの像が、天明五年（一七八五）、今から二百年近く昔、江戸の南鍛冶町に住む大井八右エ門が、同じく江戸の中橋に住む益田慶運（仏師らしい名である）に造らせて、寄進した（後述するように、西行庵に寄進したとは断定しがたい）ことがわかる。

南鍛冶町は、岸井良衛氏『江戸・町づくし稿』（青蛙房昭和四〇年刊）で、次のように解説されている（括弧内は、同書の拠った出典書名を示す）。

南鍛冶町（みなみかじちょう）

一八五〇年の嘉永版の日本橋南絵図によると、南大工町と狩野探淵屋舗、畳町の間で、外濠と南伝馬町二、三丁目間に、一丁目と二丁目とある。

一六三二年の寛永図には、かぢ町、同二丁メと出ている。

一六七〇年の寛文図からは南かぢ一丁メ、同二丁メとなっている。神田の鍛冶町に対しての南であろう。

幕府の鍛冶役の者の居住地〔志料〕

狂言師鷺伝右衛門

同 鷺小伝次

同 矢田清兵衛〔図鑑綱目〕

江戸前御蒲焼、三村定治郎

御膳生蕎麦、増田屋紋治郎

同、大黒屋弥兵衛〔酒飯手引草〕

◇一丁目

菓子おろし所、尾張屋伊八

紀州御用御料理、梅松屋政五郎〔買物独案内〕

◇二丁目

煙草問屋、奈良屋卯兵衛〔買物独案内〕。

名主、中野五郎兵衛〔統砂子〕

明治五年に一・二丁目を合併。その地積は五千百五十七坪〔志料〕

現・中央区八重洲五丁目の内と同京橋二丁目の内

とくわしい。そこに住む「大井八右エ門定恒」は、諸資料にまったく名が見えないが、名字帯刀を許されるような富裕な商人であることが想像される。

なお細工人の「益田慶運」は、その姓名から推して仏師であろう。「益田」の姓は、同勤^{きんせい}齊、同遇^{くうしよ}所など、篆刻家に伝えられている。「中橋」は、橋の名として各所にあるが、地名として概当しそうなのは中橋^{なかはしろう}広小路^{ひろこうじ}町である。現在の中央区八重洲三、四丁目の辺で、南鍛冶町ときわめて近い距離にある。

さて、この「大井八右エ門定恒」は、江戸時代の人名録はおろか、『国学者伝記集成』などの近代の人名辞書の類にも、その名をまったく見いだせない。わずかに『国書総目録』の「著者名索引」に、「大井定恒」の著述として『桂谷の記』『杉田記』『よさの海』の三書の名が見える。このうち『よさの海』は、「地誌、⑤、旧浅野家」とあって、戦災で焼失してしまっている。わずかに前二書が叢書『片玉集』中に収められて現存している。

以下、国立公文書館内閣文庫蔵の同書によって、大井定恒についてわかる所を紹介して行く。

三、『杉田記』と『桂谷の記』

まず、『杉田記』について。

「杉田」は、現在の横浜市磯子区杉田一丁目から九丁目である。最寄りの駅名として、国鉄根岸線新杉田駅、京浜急行線杉田駅がある。『新編武蔵風土記稿』巻七九、久良岐郡之七に「杉田村」を説明して、次のように述べている。

杉田村は、東の方海浜にあり。正保元禄二回は寺家村と記す。杉田は古名にて妙法寺大寺なりし故、中頃寺家村と号し、今又古名に復せり。彼等縁起に古此地杉多し、故に杉田の名起れり、今此辺二十二ヶ村皆其地なりしといへり、(中略)江戸日本橋より行程十二里、東は海岸に添ひ、西は保土谷宿より金沢・鎌倉に達する往来を隔て中里村に隣り、南は富岡村に接し、北は中原村に界ふ、東西南北皆其徑十二丁に余る、土地多斥鹵なれば穀類野菜相応せざるをもて、珠に梅樹を多く植て其子を採る、今江戸の人杉田梅とて、花時觀賞の遊客至るものは即、此所なり(中略)、

されば花時には芳香数里に及び、景色ことに勝れたり、文人往々雪霜を侵して遊賞し、今は梅花の一名区となれり(以下略)。

すなわち梅の名所として知られていたために、江戸文人たちの紀行文が多くある。『国書総目録』で見ると、

杉田日記(清水浜臣著、文化七年刊)

杉田村觀梅記(佐藤一斎著)

杉田遊覽誌(竹村立義著)

杉田雜記(同著、文政八年成立)

杉田觀梅紀行(小島春漁著)

杉田紀行（石永貞著）

があり、『杉田日記』『杉田遊覧誌』は、『神奈川県郷土資料集成』六に収められてもいる。これらの中の代表的なものは、清水浜臣（一七七六一一八二四）の『杉田日記』であるが、それは佐村八良氏『国書解題』では、内容が次のように紹介されている。

著者が武州なる蒲田及び杉田に梅見したる時の雅文紀行なり。道すがらの景色、神社、仏寺、地名等委しくおもしろく記されたり。歌は杉田にて読みたる長歌一篇のみ。

大井定恒の『杉田記』は、『郷土資料集成』にも洩れていて、まったく世間的には知られていない。しかし、浜臣たち国学者や漢学者たちの文章とちがって、町人の人情こまやかな旅の経緯が記されている点がおもしろい。

まず書き出しである。（適宜、読点を付した）

去年の冬より世のなりはひのせはしうくしたるに、心やりせんと思ふに、此比こそ梅は盛なれ、杉田といへる所は、江戸より一日の道をへたつれば、花の盛を人伝にのみ聞なしくとせかあたに過ぬるを、誠や花見てくらす春をすくなきなとおもひしられて、かしこの梅一たひは見まほしう、うしろやすき中なれば、周久ぬしをいさなひつつ、寛政四年如月十一日のあした、空のとかなれはいそきさうそきて宿を出る、

霞たつ空をしらくに梅の花咲つゝ匂ふ里やたつねん 定恒

よしさらは行て尋む咲梅の花にいさなふ言のはの友 周久

定恒の出発したのは寛政四年（一七九二）二月十一日、「周久」（この人物、伝不明）といっしよであった。周久は、以下に続く文章中で二十首もの歌を詠んでおり、定恒とは「言の葉の友」すなわち和歌をたしなむ友人同士というわけであった。なお引用文中の「花見てくらす春をすくなき」は、『古今集』賀・藤原興風の「いたづらに過ぐる月日は思ほえて花見て暮す春ぞ少なき」をふまえている。

次に高輪、品川の宿を過ぎつつ、それぞれ歌を詠む。そしてそのあたりから、「正方」という人物が加わって

三人の旅となる。

折しも川崎の宿なる正方ぬし、江戸よりのかへるさなりとて行あひぬ、三とせのおほかなき、なにくれかたらひとみなふ、遠山霞といふ題を出して、道すからよめる、

朝日影匂ふ霞のひまもれて残る高ねの雪もはるけき 定恒

雪もはや残らず消えて薄緑霞ににほふをちの山のは 周久

雲かゝる峰のみ晴て遙なる山本かすむ春のゝとけさ 正方

「正方」(この人物も、伝不明)は、川崎の宿の人だったが、三年間江戸に暮らしていて、今、わが家へ帰ろうとするところだったのである。二人が杉田へ行くと聞いて、正方は、明日の晩は必ず寄りなさいとすすめる。正方と別れ、二人は川崎の宿のはずれで昼食をとり、鶴見、神奈川の宿をへて、その夜は程ヶ谷の宿に泊まる。その夜、二人の詠んだ歌は、

うきそともおもはてむすふ草枕かたらひなれし友をたのみに 定恒

かりそめのすさみにむすふ草枕一夜ふたよはうきもおもはず 周久

と、旅の憂さにかこつけて友情を確認しあうものである。実際この紀行文のよさは、いわゆる名所遊覧記にならず、登場する人間の心情がよくあらわれている点である。

次の日は金沢街道を進んで、「いしな坂」「岡村」「しみづ坂」「森村」を越えて、杉田村に着いた。村中、梅の花と匂いにみちみちて、二人は夢心地でさまよい歩いたが、霊桐山東禅寺の近くで、とある家の主とめぐりあったのである。

やふしかくれの家のかこひに、こめきたる梅のわきて匂ふを立よりてことゝへば、あるしも立いて、「はるく」の道を花みんとこし給ふなんいとをかし、しはしやすらへかし、花あるかたをあないしてくはしく見せ申さん」なといふもたのめしう、出居のはしにやすらふ、……(中略)、

やかてあるしにいさなはれ、山のそかひをつたひ行に、海つらの霞のひまに真帆かけしふねのいとうららか

に見えわたるなど、又いみし、所の鎮守なりとて、八幡のみやしろまします、神さひたる森に木つたふうくひすのこゑも、花のあたりやめてきけんとをかし、世の春のいつくはあれと、磯山かすむわたりに、花鳥の色音のとなる、心ある人はまいてたのしからまし、

長閑なる句をそへて梅枝に色音あらそふ春の鶯 定恒

香に、ほふ梅の梢につたひきつこゑもめてよと鶯や鳴 周久

(中略)、村のはしに出れば、牛頭山の妙法寺といふあり、牛頭天王の御社まします(以下略)、

ここに出てくる社寺は、それぞれ『新編武蔵風土記稿』にも見える。すなわち「東禅寺」は、

境内、除地、三丁に二丁、小名門前にあり、禪宗臨濟派、関東十刹の一なり、靈桐山と号す、惣門を入こと凡十八九間にして、中門を立、靈桐山の額を掲ぐ、落款に見円覚峻衡碩書とあり、又五六間にして池あり、小橋を架す、又二三十間にして本堂に至る、中門の内左右に塔頭並べり(以下略)、

「八幡のみやしろ」は、

除地、一町四方、小名宮原にあり、村の鎮守なり、石階数級の上に石の鳥居を立、本社一間四方、上屋五間に三間、東向、神体金像長八寸五分許、法体の姿にて右手に軍扇を持つ、勧請の年代詳ならず、間宮某納めたる像といふ、例祭六月十五日、九月二十五日、社後の山上より眼下に梅林を臨み、花時其景尤美なり(以下略)

「妙法寺」は、

除地、三町余に二町余、小名大戸にあり、法華宗、下総国中山法華経寺末、牛頭山と号す(以下略)とある。おもしろいのは、そのあとの文章である。

もとの家ゐに立帰りあれば、あつものてうし、昼のかれるいたしける、またなれぬ人のかくまでねもころにもてなしものせらるゝもおもひかけず、さきのとし／＼いきける人の歌、短冊に書しいかいの句も、さま／＼なるをとうてつゝ見せける、我もつかのまなからみしかき筆とりあへすふところ紙に書つく、

いつの世のたねか栄へて此里にかすもかきらすさける梅枝 定恒

風さそふ浪の花さへ匂ふまで渚をかけてさける梅かえ

春ことに磯か袂やかほるらんかよひ馴たる梅の下道

旅衣袖にかほるやとまるらん梅さく春の里を尋て

いへもとそ生そふ梅の咲いてゝにほひのとけき里の春風 周久

さし梅にいふせき螢の苫屋まで花のか匂ふ春風そ吹

尋こしかひもこそあれ梅の花あまた咲そふ里の一むら

あるしうれしうやおもひけん、さまゝの事かたらひける、

杉田村の某家の主人も、風流を愛する人だったのである。この地をめでおとずれる文人たちが歌や俳諧を詠じて短冊に書いたものを、手もとにとどめていたのである。もちろん定恒たちにも注文して書いてもらった。もしその家が杉田に現存しているなら、かなりの旧家と見てよい。また、どんな人たちが物を書き残して行ったか、興味深いところである。

これに関連して思いあわされるのは、清水浜臣の『杉田日記』の一節である。彼も杉田において土地の人との触れ合いを持つが、その書き方は、大井定恒の場合とまったく対照的である。

はじめの妙閑寺の北、よしあしの翁といへるかもとにいこへり、かのもろこしのむかし、われとわが臂を折りし翁をや思ひけん、又馬のうせたるよろこべる翁をやしたひけんなど、心にくかりしに、名にも似ぬかいなでのゐなか翁なりけり。されとおなし賤か家の中には、いさゝか心しらひありて、梅とふまらうといこはせんまうけせり。簀子にしりかけて、わりこさゝえなととうてつゝしはしあるほと、かたへを見れば、壁におしはりたるからやまとのうたいと多かり、かゝるすさひは、心おとりするわさなれと、かた田舎にはめつらしく興をそへたる心地して、かたはしよりひとつくよみ見れば、大かた皆相しれる人ゝのにて、去年のも今年のもまされる中に、こたひもろとともにと契りし渡辺章、僧大定などか去年の春とひきてよめるもあり、

又今年なるは狩谷被斎は十日としるし、詩仏米庵などは十一日とかいつけたるも見えたり。

「妙閑寺」というのは、「妙法寺」の記憶ちがいかもしれないと思われるが、それでも大井定恒の会った土地の人の家とは、場所が少しちがう。また浜臣は文化四年（一八〇七）の春ここをたずねたのだが、それは定恒のたずねた寛政四年（一七九二）から十数年後のことである。したがって、「よしあしの翁」が同一人である可能性はうすい。しかし、土地の人の行為として、たずねてくる文人たちに書画を乞う様子は、まったく同じである。

ところが、大井定恒の方は既述のように意気投合し、感謝の心をもって対しているのに、浜臣はまことに冷たい。その号にふさわしくないといふ「名にも似ぬかいなでのゐな翁」と呼んだり、詩歌を書くことを「かゝるすさびは、心おとりするわざなれど、かた田舎にはめづらしく興をそへたる心地して」と、明らかに都会人の意識で向かいあっている。もともと浜臣は、旅立ちの時は二、三人の仲間といっしょに出かけるはずだったのが、都合が悪くというので、供人も連れずただ一人杉田に來たのである。来てみれば、「こたびもろともにと契りし渡辺章、僧大定などが去年の春」すでに來ていた事がわかった。あるいは友達の方には、浜臣と同行して楽しくないと思うようなものが、浜臣の性格に存在していたのかもしれない。

人々の詩歌を見ているうち、浜臣も自然に筆をとって長歌と短歌二首を書きつけるのだが、その際にも「酒といふものは、水くきのすさびをさへゑはするにやあらん、おのれもいさゝかのゑひごこちにもよほされて、筆のしりとりて長歌ものしつ」と、理屈をこねたい方をしている。このほかの部分も読んでみると、清水浜臣の一段高く構えた姿勢を感じさせられることが多い。

それにくらべ、大井定恒の、本人自身も無名であることをわきまえた情緒深い人との対応に、改めて自然さ素直さを感じさせられるのである。

さて、大井定恒と周久の二人は「夫より又こん春を契て名残おしみつゝ」杉田村を離れ、森村、清水坂、程ヶ谷をへて、約束の「正方ぬし」の家についた。宿は、知人の「常時」（伝不明）の家とさだめて、その夜は当座の歌会となる。

やがて正方ぬし、詠草紙、短冊もちきたる、人々つとひて、春六重組題を出してよみける、

梅香留袖

さく梅の袂にあまる匂ひよりをくれてさそふ花の下かせ 喜寛

翠柳誰家

せになひく心もしるく青柳のみとりを友と誰かすむらん 正方

水辺踰躍

咲つゝく岩根のつゝし影見えてくれなる深き春の川水 宣方

故郷歎冬

昔みし色もかはらす故郷のまきあらさて咲ける山吹 定恒

雨中散花

春雨の露をもかけて松かえに紫ふかくにほふち波 周久

のかれすむ山の奥にもくれて行春の名残そやるかたもなき 常時

当座よみをはり、夜も更ぬめりとて人々かへりつゝ、こよひはいとめつらしき円居に、旅をうしともしらてふしぬ、

内閣文庫本では、常時の詠歌の歌題が書き落とされているが、そのままにした。ここで新たに登場した「喜寛」「宣方」が、正方、常時と同じく、川崎の住人であろう。

やがて夜が明けると、二人は常時と別れを惜しみつつ、また江戸にむかう。大森で昼食をとり、鮫津をへて帰宅する。そうして最後に、次の文章があつて一篇を結ぶ。

日くれなんとせしころ、正恭ぬしのとひきたり、杉田の物語し歌なと見せけるに、筆をとりかゝれる、程ヶ谷の馬屋なる杉田の梅見むと契しに、さはる事ありてともなはさりしを、人々の帰来て、彼里の花多んなるよしものかたりするを聞て、

いたつらにとはて杉田の梅の花日をふるほとやうつろひなまし

かしこに有ける花のあるしの心有けるよしをおもひやりて、

さく梅の色をも香をもしる人になるゝやあかぬ梅の下庵

又、川崎のやとにして当座の歌読けるよしなと聞えしかは、

ことゝふもかひある旅の中やとり心やとめしことのほの友

『程か谷の』以下の文と「いたつらに」「さく梅の」の二首とは、正恭のものである。また、「又、川崎の」以下の文は定恒だが、「ことゝふも」の歌は正恭のものである。

この「正恭ぬし」は、『片玉集』五四巻に「正恭を送る序」という文章があつて、その冒頭に「つふらの正恭」と姓名が記されている人物、すなわち『片玉集』の編者である津村正恭（？—一八〇六）であろう。

『名人忌辰録』『国学者伝記集成』等によつて、津村正恭は、通称三郎兵衛、深庵ふかあんまたは藍川と号したことがわかる。佐竹侯の御用達として江戸伝馬町に住し、和歌をよくする。成島錦江の門に学び、石川雅望の師である。

さて、『翌寛政五年六月、現在の静岡県修善寺町に保養の生活をしていた時の執筆になるのが、『桂谷の記』である。

この文章は、内容からいえば地誌に分類されるものであらう。友人との心楽しい紀行の記録である『杉田記』とちがって、ここでは一人保養しているためか、修善寺の歴史や風俗を淡々と紹介しているだけである。冒頭の一節を、以下に記す。

伊豆国桂谷といふは、西も東も山たちつゝき、南より北になかるゝ川は、岩ほのうへをはしり、滝つせのをと高うゆく、西の山本に修善寺あり、此里は寺のしれるところなれば、その名をよひて村の名となす、いにしへは天台宗成しを、弘法大師十八歳の比、此寺に入、真言宗をひらき給ひしに、いつの比よりか臨済宗にかはり、北条氏康の時、曹洞宗となりて、明の心越禪師こゝにきたり、北山のけはひ、もろこしの廬山に似

たりとて、山号を肖廬山とあらため、その文字を額にし、今の山門にかけてあり、
こういう記述で地誌を述べて行く最後のところに、注意すべき語句がある。

月の影うつろひ夏をよそなるすゝしさは、又たくひやはあるとこん秋の暮までおもひやらるゝ折しも、入あひを告るかねの声に誰も哀をもよほさゝらんやは、やかて暮そめし木陰より、露にもあらぬ光のふたつみつよつほのめくは、岩の螢のとひかふそ、興ありとみゆるに、木かくれて出るなけなる影も、墨染の袖に入かとみるは、猶哀にこそと定恒しるす、

岩波のなれぬまくらにをとつて雨かたたもる山川のみつ

うつり行影もなかれて山川のいく瀬の水に螢とひかふ

山寺の常のあらしのをとそへてゆふへさひしき入あひのかね

寛政五年六月七日

この文章中の「墨染の袖に入かとみるは」の語句が、定恒がその時出家姿となっていたことを示しているのはあるまいか。もちろんそれは、世俗の多忙を避けて隠居した一つのスタイルである。前年に、あれほど楽しげな春の旅を経験していたのに、突然の出家のようだが、年令、病氣などを考えると、あり得ないことではない。天明五年（一七八五）に西行木像を吉野に寄進した時、すでに相当の年令になっていると考えるべきであろうから、それから七、八年たった寛政四、五年は、定恒の晩年であったのであろう。
この二つの文章は、そういう性格のものとして考えたい。

四、大井定恒のこと——その二

『杉田記』『桂谷の記』二つの文章を通して登場する人物の中で、はっきり伝記のたどれるのは、津村正恭ただ一人である。

津村正恭は、数多くの随筆・紀行文・歌集をのこしているので、それらに大井定恒の名が見られぬものか、一通り調べてみた。

まず紀行文『思ひ出草』全八冊は、寛政四年（一七九二）十二月十七日難波におもむいた東海道日記にはじまり、難波の春、大和路紀行上下、都の口ずさみ上下、甲斐の紀行からなる。寛政四年といえ、大井定恒が杉田をおとずれたのがその春であり、年末難波に旅立つに際し、定恒は別れを惜しむ人の一人ではなかったかと思われるが、『思ひ出草』の中には一度も定恒の名はあらわれない。そればかりか、大和路紀行の中で吉野山を訪れているのに、定恒の奉納した西行木像について触れることがないのである。吉野水分神社は、別名を子守明神というのだが、それについては、

ここより本道に出て山陰をゆけば、子守明神のみやしるにいたる、神垣の桜盛にてあまた咲つゝきたる、いとかひある心地す、かゝれは山のふかうなりぬるもしられて、奥院の花さこそとたのもしうおもひなる、としかない。また西行庵については、

それより奥は道いとほそし、苔路をつたひゆけは、西行上人三とせ住たりける所にて、岩間よりおちくる水あり、苔清水とよめるは是になん、かく山ふかきすみかになれてとしへぬるほとをおもへは、世をいとひし人のすみはてぬる心きよさも、さらにくみしらる、

山ふかき哀もさそと跡ふりし苔の清水に袖そしほるゝ

なほ一町あまりくたれは、庵のあととてそこはかとなき山中に、板屋にてかこひたる所あり、ちかきころもなにかしひしりとかや住わたりつるといふ、その名残なりけり、庵わたり花あまた盛にて、しら雲のこりしけることく、白妙に咲こほれたり、

とある。西行庵跡と伝える所に、西行を慕って隠者ふうの生活を送る僧が、当時もいたことがわかる。いったい定恒は、西行木像をどこに奉納したのか、はつきりしないのである。

正恭の紀行文は、亀戸天神に出かけた『さかさいに遊ぶ記』、友人磯野政恒の内藤新宿近い別荘に出かけた

『遊角筈別荘記』、隅田川をたずねた『花見の日記』があるが、いずれも宝暦十二、三年（一七六二・三）の若い頃の紀行で、友人たちの名の多くは和歌を学んだ成島家一門の人たちである。また、寛政二年、江戸から出羽国に至った旅行記『雪の古道』にも、定恒の名は見えない。

さらに随筆『譚海』は、一五巻からなる日本各地の奇談、古今の話題を書きつらねたものだが、定恒の名は見あたらない。また『冷泉家御褒詞詠藻』二巻は、正恭の同門の友人たちの詠藻で、冷泉為綱、為泰の評を加えてもらった作品を、四季・恋・雑などに分類した私撰集であるが、定恒の詠はない。『杉田記』に登場する人名と一致するものに、「正方」なる人物はいるが、「甲斐庄武助」と注せられていて、これは別人ではないかと思われる。

以上を要するに、津村正恭は、大井定恒にとって決して親しい間柄ではなかったようである。たまたま『杉田記』にその名が記されていたから正恭は、『杉田記』『桂谷の記』の二篇の文章を、自分の編纂した叢書「片玉集」に入れたという程度のものであったのだらう。

定恒にとって親しいのは、同じく無名の「言の葉の友」周久であり、川崎に戻った正方たちである。無名の小グループの中で、和歌を詠みあい、花をたずねる生活をしていたのである。そういう無名人の行為であるから、今日吉野水分神社に伝わる西行木像は、おそらく奉納の最初から人々に注目されることのない、ひそやかな営為であったらう。大井定恒の胸中に形成されていた西行のイメージの結晶として考えると、わずかに残った彼の文章『杉田記』は、今さらながら暖い感情のあふれたものという印象を濃くするのである。

〔追記〕 稿後、14のイロハ、15、16を調査実見した。15は右脚を胡座にし、その上に右手、左脚を立ててその膝に左手を置いて、正面を見ている。顔はなかば破損している。布地の衣服をまわっている。